男の世界と女の世界

――浄瑠璃劇の一つの対立軸――

松崎　仁

はじめに

道成寺伝説とその系統の物語や戯曲には、周知のように、女のあまりに一途な情熱から男が逃げ出すという筋がある。その男は毎年熊野に詣でて修行する僧とも山伏ともいうが、宗教者としての禁欲的な生き方を守ろうとして女性の愛を拒んだことが、恐ろしい結果を招いた。この場合、男は人間くさい愛を排除する修行者としての価値を追求したが、女はそれを容認し得ない一途な欲求を持っていたということになる。

これは男と女の価値観の齟齬の典型的な例といえるが、それがドラマの対立軸となるという例は、近世戯曲には少なくない。この稿では、浄瑠璃劇のいくつかのこの種のケースを採り上げて考えてみたい。総論的に言えば、男は女の愛とは別次元の価値を追求し、女はひたすらに愛の成就と持続を求めるというパターンがそこにはある。木下順二作「夕鶴」の、妻がただひたすら夫を愛し、夫の喜ぶことをしようとしているのに、夫は始めて知った金銭の魅力にとりつかれ、その結果妻が夫を全く理解できなくなるというドラマにも、男の世界と女の世界の価値観の齟齬による悲劇的な対立軸が、限りなく純粋透明な姿で生きていると言ってよいだろう。

一　「出世景清」の場合

浄瑠璃史上重要な意義を担うものとして名高い作品であるが、その意義は主として舞曲・古浄瑠璃の「景清」に描かれた景清伝説の近世的再生と、四段目を中心とする阿古屋の悲劇におかれていると言ってよい。その阿古屋の原型である舞曲・古浄瑠璃のあこうにおいては、景清訴人の動機が、将来に希望を持てない敗残の景清を捨てることによって「跡の栄華に誇らん」（原文の仮名に漢字を当てた所がある。以下同様）ということであったのに対して、阿古屋の場合は、熱田大宮司の娘小野姫に対する嫉妬、すなわち、極めて人間的な煩悶の結果であったとされる。また、その嫉妬をかき立てたのは、兄伊庭十蔵のもたらした景清あての小野姫の手紙、特にその中の「阿古屋といへる遊女」という一句から感じ取った姫の侮蔑であったが、もう一つ指摘されているのは、この前の場面で景清が阿古屋に向って、小野姫とは「さうしたこと」（愛情関係）では「さらになし」と言い、「そちならで世の中にいとしい者が有べきか」

とし、らを切り通していたことの嘘がここで明白となり、その裏切られた口惜しさが彼女の判断を狂わせ、十蔵の指嗾に乗って訴人を承知してしまうことになったということである。四段目で阿古屋はその時のことを「当座の腹立やる方なく。ともかくもと申つる」（傍点引用者。以下同様）と言っている。

ところで景清は、平家滅亡後も執拗に頼朝の命を狙うこと三十数度に及び、そのたびに畠山重忠に見あらわされて失敗するが、なおその志を捨てない不屈の復讐者である。頼朝への復讐は、「日本一の景清」と自負するこの英雄の、生涯を賭けて実現しなくてはならない窮極の価値なのである。そういう目的に生きる男にとって、女の嫉妬のごときものは些細な邪魔物、軽く一蹴しておけばすむような足元の小石にすぎない。だから阿古屋をだますという意識以前の軽さで「そちならで世の中にいとしい者が有べきか」と言った。その言葉はその場においては必ずしも嘘ではないだろう。だがそこには彼の存在をかけた重みなどは毛頭なかったのである。しかし、阿古屋にとってはそれが彼女の全存在にかかわる重みを持つことを、景清は当然のことながら知るよしもなかった。

さて、阿古屋が訴人をためらう間に十蔵は六波羅に訴え出て、その結果景清は清水寺で六波羅勢に囲まれるが、例の逃げ上手で行方をくらましてしまう（以上二段目）。その後六波羅による熱田大宮司の捕縛・入牢、それを救うための小野姫の自訴・入牢から拷問と続き、景清はこの親子を救うため、みずから名乗り出て牢に入る（三段目）。景清のこの行動は、頼朝への復讐という目的に照らすと不可解に思えるが、それほどに阿古屋への怒りは激しく、それにひきかえて小野姫の心を「頼もしや嬉しやな」と感謝する思いが強かったからだ、というふうに近松は描いている。

しかし、景清という英雄が女の嫉妬に振り廻されていると解するのは誤りだろう。なるほど、牢内の景清は阿古屋に「汝が心一つにて本望遂げずあまつさへ。恥辱の上の恥辱を取り」と言うから、彼の怒りは阿古屋が「本望」を妨げたことに向けられている。そして「女の嫉妬の仇（あだ）」にも言及しているが、しかしそれは腹中で毒を吐く虫のようなもので、結局阿古屋自身を害するものだと言っているにすぎない。それよりもお前の「我慢愚痴の猿智恵」によって「本望遂げず」と言って罵っているのである。

一方、景清に許しを乞う阿古屋は、きびしく自己を裁いて死ぬ決心をしているのだが、ただ一つ、訴人は打算による裏切りではなく、「嫉妬の恨みに取乱れ」てあとさきの分別を失ったためであったことだけは分ってほしいと願っている。そこでの彼女の唯一の弁明は、「嫉妬は殿御のいとしさゆへ。女の習ひ　誰が身の上にも候ぞや」ということであった。

しかし、嫉妬などという女らしい情念、ことにそれが愛情の裏返しだという論理などは、この英雄の思いつめた一念の前には全く価値を失う。昔、西行は木曽義仲の死を「木曽人は海のいかりを沈めかねて死出の山にも入りにけるかな」と歌ったが、景清の源氏への復讐の念もまた「海のいかり」である。そういう怒りを鎮めることなく持続して本望を遂げようとする英雄の志は、とうていこのような女の論理を認めることができない。

「汝が心一つにて本望遂げず」は言いすぎだという説もある。和

辻哲郎氏は、この言葉には偏執の響がある、景清の失敗は阿古屋の裏切りだけが原因ではなく、これは誇張だと言われた（『日本芸術史研究』）。広末保氏もこれに同意し、「阿古屋の言い訳に道理があれば許したとて『日本一の景清』であることを妨げはしまい。そこに偏執者的な頑固さがあ」り、かかる偏執者的性格が悲劇の感動を生むと言われる（『近松序説』）。このとらえ方は大筋において間違いではない。しかし、そのように阿古屋を否定し拒絶する心情の根底に、女の女らしい心情と決定的に対立する価値観がある。それは、激しい戦乱の世を生き抜き、今なお復讐の一念に生きる男の、たとえば嫉妬のような人間的な弱さを許せない価値観である。日常性を超えた高次の男性原理とも評すべきもので、単に偏執的かどうかというような性格学的な問題ではない。だからわたくしはこれを、男の世界（男性原理）と女の世界（女性原理）の対立軸の一つの極限的な姿だと考える。

ただし、本作ではこの対立はいつまでも続くわけではない。阿古屋が二人の子を殺して自害すると、「鬼をあざむく景清」も「さりとては許してくれよ」と慟哭する。原道生氏は「この景清の激しい慟哭に接することによって、観客たちは、これまでの彼が、その妻子を見殺しにするという非情さの背後で、実は密かに耐えていたものの深さについて気づかされることになるに相違ない」（鑑賞日本の古典『近松集』尚学図書）と言われたが、そういう人間的な心情によって、景清はそれまで拒否していた女の世界に向って心を開くことができ、それによって悲劇の主人公たり得たのである。

二　「國性爺合戦」の場合

男性原理と女性原理の対立の構図は「國性爺合戦」三段目甘輝館でも見られる。明国に味方せよと和藤内の母に迫られて、甘輝が錦祥女を殺して味方すると答えるあたりから、それは見え始める。甘輝の論理は「女にほだされ縁に引かれ腰が抜けて弓矢の義を忘れし」と批難されるから、「恩愛不便の妻を害し女の縁に引かれざる。義信の二字を額に当（あて）　さつぱりと味方せんため」というにある。妻への情に引かれて武士の道を忘れたとの批難を受けては、「子孫末孫の恥辱のがれがた」いから、そのために文字通り恩愛を断つというのが、戦いに生きる男性たる武人の論理である。それに対抗して錦祥女を守ろうとする老母の心情は、甘輝によって「慈悲心」と受け止められ、老母自身も「慈悲もつぱらの神国に生を請けた此母」と言う。つまり老母によって具現される慈悲心と、甘輝の実践しようとする武人の論理の対決である。この「慈悲心」を神国日本の徳とするのは本作で発揮されるナショナリズムの一例であるが、素直に解すれば女らしいやさしさである。それが、継子を死なせるわけにはいかない「日本のまゝ母」というような、これまたナショナリスティックな気負いに支えられて、命がけの激しい行動となった。

この二人の間に立つ錦祥女は、夫を武人の論理に忠実に生きさせるために自害する。それは同時に継母に対して誠意を尽そうとする義理の娘の捨身（しゃしん）の行為であるが、老母の激しい主張を伴う行為に対して、これは自分の存在を黙って消し去ろうとする静かな自己犠牲であって、この時代に日本女性の美徳の一つとされていた行動様式と言ってよい。

こう考えると、甘輝・和藤内母・錦祥女の三人によって展開されるドラマにも、男性原理と女性原理の対立軸があり、その矛盾をもう一つの女性原理が解決しようとする――という構造を見ることができる。

三　「仮名手本忠臣蔵」七段目の場合

この作品の七段目は、由良之助の偽装の遊興が進行する縦筋の中に、同志たる侍たちの由良之助への不信、師直に内通して情報を探る九太夫の行動、徒党の人数に加えられたいという平右衛門の願いなどが次々と展開するが、終りに近い段階に、奥方顔世からの密書を読んでしまったおかるを、由良之助が請け出して殺そうと計るところがある。亡君の恨みを晴らすという大目的のために結束した塩冶浪人の一味とは、今風に言えば恐るべきテロリスト集団であるから、秘密を守るためには、大事を知った者は容赦なく消し去らねばならない。それが由良之助の非情なサムライの論理である。

由良之助のこの意図を理解した平右衛門は、足軽の身で徒党に加えてもらうためにおかるの命を奪おうとする。どうせ由良之助に殺される妹なら、「大事を知ッたる女。妹とて赦されずと。それを功に連判の。数に入てお供に立ゥん」と考えるのである。久しぶりにめぐり合った兄が突然妹を斬ろうとする意外性に富んだ展開の裏には、そうでもしなくては徒党の数に入れられない「小身者の悲しさ」があった。そこに視線を据えて、武士からは差別される足軽の辛さを描いているところに、本作のすぐれた点の一つがあることも見のがせないが、それは当面の問題ではない。本題に戻ると、この平右衛門もまたサムライの世界の正義（仇討の大義）のために、あらゆることを犠牲にして悔いない男である。

ではおかるはどうか。彼女ももとは塩冶家に奉公した者であるし、勘平の女房として夫の志を理解し、そのために遊女となっていて、勘平からの便りがないのは「身の代を。役に立ての〔敵討へノ〕旅立ちか」と思っていた女である。しかし、忠義とか亡君の鬱憤を散じたいとか、侍たちがふたこと目には口にするような言葉は、自分の口からは全編を通じて一度も言っていない。六段目で「主の為に」身を売ると二度も言っている（「主」は勿論夫勘平）ように、ひたすら夫のために尽す意識で行動するが、ことごとしい「ますらを」の志を抱く烈女ではない。勘平への愛情で生きている「めゝしくはかなき」（『石上私淑言』）心情の持主である。それは、父与市兵衛と夫勘平の死を知らされた悲しみの中でも、「勿躰ないがとゝ様は非業の死でもお年ッの上。勘平殿は三十に成ルやならずに死るのは嘸悲しかろ口惜しかろ。逢いたかつたで有ふのに。なぜ逢せては下さんせぬ」とくどき立てる嘆きによく表われている。建て前としての孝道が夫婦愛より上に位置づけられる時代に、父のことよりも夫を思う情愛を訴える素直さが、この女の身上である。

だから、おかるが兄平右衛門に命を投げ出して、「首なりと死骸なりと。功に立ッなら功にさんせ」と言うのは、仇討の大義というようなもののためではない。勘平に死なれて、今は生きる希望を失ったからである。由良之助や平右衛門の行動が仇討の大義に生きる男性原理に立っているのに対して、おかるはひたすら夫を思う情愛に生きる女性原理を体現していて、この二つの原理の矛盾がおかるを

めぐる劇的葛藤を形成しているのである。

四　「熊谷陣屋」の場合

「一谷嫩軍記」三段目熊谷陣屋については、かつて『「熊谷陣屋」の作劇法』（拙著『歌舞伎・浄瑠璃・ことば』所収）に於て縷々述べたことがあるが、その論の中で、墓参から帰った熊谷と、思いがけなくそこに来ていた妻の相模や敦盛の母藤の局との間に、複雑な劇的緊張が生れていて、そこに武門の原則と母親の情、男の世界と女の世界の対立があること、その対立軸は最終場面の「御縁ッがあらばと女ゴ同士（どし）。命があらばと男同士（どし）」という別れの挨拶に至るまで貫かれていることを論じた。それを繰り返すことはいかにも重複であるが、本稿の趣旨から見て全く省略するわけにも行かないので、簡単に触れておく。

本作では義経が後白河院の落胤敦盛を救おうとし、院と藤の局に恩義のある忠実な部下熊谷、しかも丁度敦盛と同年の男子小次郎を持つ熊谷に、残酷な命令を与えることからドラマが動き始める。これは極めて政治的な意味を持つ命令であり、ここでの義経はまことに冷徹な政治家であったが、熊谷はよくその意志を理解して巧みに敦盛と小次郎をすり替え、敦盛を救い小次郎を身替りに討つ。熊谷はこの小次郎の首を義経に「敦盛の首」なりと認めさせ、その秘密を胸に包んだまま出家しようと思っている。ところが熊谷の陣所に思いがけず妻の相模と藤の局が来ていた。その上に鎌倉からの目付役である梶原まで来ている。そういう状況の中で、熊谷は小次郎の首を敦盛の首なりとする建て前――政治的虚構（フィクション）――を守り通さねばならない。

この場合、第一に熊谷を困惑させるのは相模の存在である。熊谷は小次郎の死という真実を知った時の妻の悲しみを思い、心中に妻を憐みつつ、表では戦う武士としてきびしく妻を叱りつける。武門の原理と母親の情の矛盾である。次に藤の局が熊谷にわが子の仇と斬りかかることから、熊谷の「物語」となるが、ここで熊谷は藤の局に敦盛がけなげに死んだことを知らせつつ、心の中では、相模があとで真実を知った時、小次郎は立派にいさぎよく死んだと思ってほしいと願いつつ物語ることになる。

このあと、藤の局の手向けの笛にさそわれるようにして、敦盛の影が障子にうつることなどあって、いよいよ熊谷は首桶をたずさえて実検に向う。その時相模と藤の局は首を一目でも見せてほしいと熊谷にすがりつくが、熊谷は実検にそなえぬうちは「内見は叶はぬ」ときびしく拒絶する。ここで二人の女が首を見れば「敦盛の首」という虚構は破れ、秘密は奥で様子を窺っている梶原に知られてしまうからである。だから女たちを拒絶する熊谷の気魄は、現行演出ではそれほど強い身体行動とはなっていないが、「はね退突退（のけ）」と語られるにふさわしいものであるはずだ。

さて首実検の場で熊谷の緊張は頂点に達する。劇的要因の第一は、熊谷がわが子を犠牲にしてなしとげた行為が義経の意図に沿うものであったか、それとも「直実過（あやま）りしか」という、熊谷の全存在をかけた問題であり、第二は、この虚構を守り通すために、女たちを沈黙させねばならないことである。このようにして「熊谷陣屋」の劇的緊張は、政治的虚構（建て前）を守り通そうとする男の原理と、

建て前よりも肉親の情に忠実な女の原理との対立によって、より高められている。

この首実検がすむと、義経は熊谷をねぎらい、この首には「所縁（ゆかり）の人も有べし。見せて名残を惜ませよ」と言うので、首は相模の手に渡される。この時、きびしい武士の論理や男の世界の建て前から女の心情が解き放たれ、女は男の作った無残な事実を受けとめて、泣けない男（熊谷）の代りに存分に泣く。それが死者への鎮魂ともなる。

こうして男の世界と女の世界はドラマの中で対立軸を形成しつつ、互に補い合っているのである。

五　「妹背山婦女庭訓」山の段の場合

この作品についても、以前「『山の段』の構造――『妹背山婦女庭訓』研究――」と題して、男の世界と女の世界の対照と矛盾の中で、若い男女の愛が悲哀に満ちた過程を辿って実現することを論じた（前掲拙著所収）。これについても本稿の趣旨に添って簡単に繰返しておく。

これは舞台そのものが川を挟んで男の世界と女の世界を構成しており、幕明きから「恋」だけが話題となっている妹山に対して、背山の久我之助は、入鹿が簒奪した政権下のきびしい政治情勢に心を悩ませている。天下国家の危機的状況が心を占領している男の世界と、吉野川の急流を渡っても久我之助のもとに行きたいと言う「思ひ詰メたる女気」の世界とは、川の両岸に対照的な劇空間を形成している。言い換えれば、雛鳥を愛しながらも、入鹿討滅という政治的目的のために苦慮する男の世界と、一途に恋に生き恋に死のうとする女の世界の対照である。

そこに登場する二人の親はというと、大判事はいかにも豪毅一徹な古武士風の父親、定高はそれに対抗しつつ太宰家の名誉と存続の責任をになう男まさりの後室である。しかしこの母が妹山にもたらすのは、事もあろうに雛鳥を入鹿のもとに入内させるという縁談であった。雛鳥の悲嘆と定高の苦悩はこの入内をめぐって深まるが、雛鳥もいやおうなく入鹿政権下の政治状況の中に組みこまれ、死を以て入内を拒否するほかはなくなる。一方背山では、久我之助が入鹿の手から采女を護り通すために切腹する。死を以て秘密を守ろうとするのである。しかし、そういう苦悩に満ちた葛藤を経て、双方の親たちは長年の反目確執にもかかわらず子供たちの恋を認め、「心ばかり」は夫婦として死なせてやろうとする。その劇的過程には種々論ずべき問題があり、前記論文執筆時とはわたくしの解釈が変った点もあるが、本稿の主題とはずれるのでここではぶき、次のようなことを確認しておこうと思う。

久我之助が九寸五分を腹に突立てた時、大判事は「女の頬（つら）一目見てなぜ死なぬ」と言う。彼らしい節くれ立った、しかし精一杯の思いやりの言葉である。が、久我之助は「此期（ご）に及んで左程狼狽（うろたへ）た未練な性根はござりませぬ」ときっぱりと言う。女に引かれて節を曲げないという武士の建て前を、彼は極度にストイックに守って死のうとする。しかしその時彼は、相図の桜の枝を花ながら流し、久我之助が「降参承知致せし体（てい）」に妹山側へ知らせてくれと頼む。それは勿論雛鳥が死なぬようにという心づかいであるのに、ことさ

らに雛鳥の死による太宰の家の断絶を防ぐためだと言い、久我之助が降参と思えば雛鳥も得心して入内するだろうから、そうなるようにはからうことが「色に迷はぬ潔白」のあかしだと言うのである。作者はこのように武士の建て前をストイックに立て通すさまを、清純な青年の志によって純化された男の世界として描きたかったに違いない。

しかしそのあとに、両方の若者が命を捨てていたことを親たちが知る場面がある。

思ひ切たる首諸共。わつと泣声答ふる 谺。肝に徹して大判事。刀からりと落たる障子。ヤア雛鳥が首討つたか。久我殿は腹切てか。ハアしなしたり

これは、互に相手の若者が死なぬようにと心を砕いて来た苦心が空しかったということを知る瞬間である。同時に、男の世界と女の世界が互に相手の深い深い思いやりを諒解し合う瞬間でもある。

このあと親たちにできることは、せめて久我之助の息のあるうちに雛鳥のなきがらを嫁入らせることしかない。定高の願いは大判事によって快く受入れられる。女の世界の愛の願いが、男の世界に受入れられるのである。雛流しの時は吉野川が両岸を結びつけるようにゆるやかに流れて、両家の和解を象徴的に表現するということは、観客のだれしもが感ずることであろう。

本稿では大幅に省略してしまったが、大略このような迂余曲折を経て「山の段」が最後に強く訴えかけて来るのは、男の世界で推し進めようとしていた入鹿討滅という政治的課題が一歩前進したということではなくて、清純な若い男女の愛が死によって、しかし女の世界の願いに寄り添うようにして実現したということである。「愛」の主題は、男の世界と女の世界の対照と矛盾の中で、屈折した表現を獲得していたのである。

六　九郎御曹司の場合

「鬼一法眼三略巻」は、「義経記」以来舞曲・御伽草子・古浄瑠璃に繰返し描かれて来た鬼一法眼説話を取り入れて作られている。現在上演される三段目「菊畑」「奥庭」の場がそれである。

鬼一法眼説話の骨子は大体次のようなものであった。陰陽師鬼一法眼は「文武二道の達者」（義経記）で、天下の秘書「六韜」を秘蔵していたが、御曹司牛若は法眼の娘に近づき、男女の仲となったのちに、娘に宝蔵から秘書を持ち出させ、これを読破して秘術を体得してしまう。法眼は弟子の湛海に牛若を討たせようとするが、娘がそれを牛若に告げるので、牛若は裏をかいて湛海を討つ。しかしその後牛若は娘に暇を告げて去る。「義経記」では娘は「嘆き死に死」んでしまうことになっている。

この鬼一の娘は「義経記」では名がないが、他の伝承では「みなづる（皆鶴）」で、牛若がこの姫に近づくのは兵法の書の披見が目的となっている。例えば奈良絵本「みなづる」（『室町時代小説集』所収）では、「かやうにこゝろをつくししも　一ゑにひやうほうおかまんそのためなりとおほしめす」と説かれ、姫と「うちとけかたら」うようになると、牛若はすぐに兵法の書を見せてくれと頼み、姫はこれに応じれば契りは千代までと頼もしく思うが、本文には姫の「こゝろのうちこそはかなけれ」とあり、果して、望みを達する

と牛若は隠していた身の上を明かし、姫を振り切って東に下る。捨てられた姫は「末とげぬ契りぞ今は恨めしき」と嘆く。後に義経が平家を滅ぼしたのは「ひとへにかの兵法の徳とおぼえたり」と物語は締めくくるが、姫はどうなったか全く記述がない。『幸若舞曲集』所収奈良絵本「みなづる」もほぼ同様である。

同型の説話は御伽草子「御曹司島渡り」にもある。義経は蝦夷が島の大王の持つ兵法の巻物を手に入れるため島に渡り、大王の姫朝日天女と契り、来島の目的を語ると、姫は巻物を石倉から取り出して書き写させ、日本に逃げ帰る手段まで教える。後日、姫の死を知った義経は供養をする――というものである。このような御曹司と兵法の秘書にまつわる説話がいかに定型化していたかを示すのが、御伽草子「天狗の内裏」である。この物語では源義朝が義経の未来を語る未来記語りの趣向があって、義朝はわが子義経が将来「四国讃岐の国　法眼につたはる　いしたまるた神通（ママ）（じんつう）といふ巻物」を「法眼がひとり姫皆鶴女（みなづるをんな）に契りをこめ」て「盗み取」ることになると語る。それだけではない。鬼の島に渡り、そこでも大王の「一人姫　朝日天女に契りをなし」て、大王の持つ「虎の巻物」を聟引出物に取るであろうと語るのである。義経は二度も同じようなことをするというように未来記語りをされているわけで、娘と契ってそれを利用して兵法書を手に入れることが、御曹司物語のハイライトの一つであったことが察せられる。

しかし近世に入って「遊屋物語」（延宝四年刊、加賀掾正本）になると、ややおもむきが異なってくる。牛若は鬼一の館に入り、男色好きの鬼一の寵童となって兵法の稽古に励む。鬼一の娘かつらの前は兵法の達人で、父の命令で牛若と太刀打するが、互角で勝負が決しない。しかしこれが縁となって牛若は姫に恋し、姫も牛若に惚れ、侍女の仲立で結ばれる。二人が相惚れになるところが新しい。さて、型の如く姫が兵法の秘書を宝蔵から盗み出して牛若に見せ、牛若はこれを読破して秘術を手に入れる。それを知った鬼一が北白川のたんかいに牛若を討たせようとするが、姫がそれを牛若に告げ、牛若とともにたんかいとその弟子たちを倒す。ここまでが「鬼一法眼三略巻」に影響を与えている。しかし「遊屋物語」では、牛若は姫とともに紀州藤代の鈴木庄司のもとに難を避ける（以上四段目迄）。物語の中の姫の存在はここまでで、五段目には登場しないが、兵法の巻物披見のために牛若に利用され捨てられたという描き方はされていない。

なお本作の続編たる「うしわか虎之巻」（同年刊、加賀掾正本）では、かつらの前は再び登場して牛若とともに戦って鬼一の軍勢を撃退するが、姫はまもなく病死する。死にぎわにわたくしは天神の申し子であると語るので、牛若が天神伝説の一くさりを物語るというような脇道の趣向が入り（四段目）、牛若は姫の供養のために紀州道成寺の鐘を再興する。これは五段目に能「道成寺」を浄瑠璃に採り入れるための筋立であろうが、物語の上ではかろうじて牛若と鬼一の姫との縁は続いていて、曲りなりにも姫は牛若の供養を受けるのである。

このような先行物語をふまえて「鬼一法眼三略巻」が作られる。近世中期の時代浄瑠璃の常として複雑な筋を構えるが、牛若（虎蔵）・鬼一・皆鶴姫・湛海の四人に絞って要約すると、皆鶴姫は清

盛の前で湛海と立合って負かすほどの兵法の達者であるが、既に奉公人虎蔵を牛若と見抜いて恋い慕っている。一方、清盛が以前から虎の巻を差出せと言っているが、鬼一は従わない。牛若は鬼一に直接虎の巻披見を要求しようとするが、鬼一はかねて自分が鞍馬山の天狗と称して牛若に兵法を教えていたことを明かし、源家再興に寄せる志を語り、虎の巻を姫に渡し、これを持って「思ふ方へ嫁入せよ」と言うので、姫はすぐそれを牛若に渡す。牛若は鬼一に感謝し、姫と夫婦となろうと言い、奥儀を授かる上は源家再興は「掌（たなごころ）に握ったり」と勇み立つ。鬼一は「娘　鬼三太　若君の御供し早落ちよ」と言って自害する（三段目）。これで鬼一と兵法の巻物の一件は完了し、その後は全曲の終りまで皆鶴姫は登場もせず、姫について語られることもない。姫はここでも御曹司物語の中のある場面にだけ登場して消えて行く女性の一人である。とはいえ、室町時代の鬼一説話や島渡り説話に比べると、御曹司に利用されて捨てられるだけの存在でもなく、恋する女としての存在感を持っているところが、近世の戯曲らしいところである。

このように中世風の物語の世界では、例えば源家再興の使命を帯びた御曹司のような貴種の人物は、女性が捧げる愛を受け入れ、あるいは利用してその志を遂げることが、正当な生き方とされていた。「鬼一法眼三略巻」にはその伝統がなお生きつづけていたのである。

この点は「浄瑠璃姫物語」の系列においても同様である。矢作の宿で姫と契った牛若は、その一夜が過ぎると当然のことのように姫に別れて東に下る。また、吹上で姫の力によって蘇生した時も、諸本によって多少の違いはあるが、平家追討・源家再興の志を告げて東に下る。矢作の宿に帰って共に暮すことを願う姫の思いはかなえらうるべくもなかった。牛若のような人物の男性原理は、女の愛を長く受入れてはいられないのである。

これは貴種流離譚の性格でもあろう。それが生きていた中世風物語の世界では、男の志と女の献身とは、わたくしの言う男の世界と女の世界の対立軸とはならなかったと思われる。これに対し、時代が下って「鬼一法眼三略巻」では、牛若と姫の間にこの種の対立軸が生まれてもよいところである。しかし、牛若は姫の愛を利用するわけでもなく、ドラマは鬼一の牛若に寄せる源家再興の志というテーマに移り、その志にもとづいて鬼一自身が虎の巻を牛若に贈ることになり、姫と牛若は結ばれるから、問題の対立軸は生まれるべくもなかった。やはり御曹司説話の伝統からは、はみ出さなかったのである。

七　「妹背山婦女庭訓」藤原淡海の場合

このような貴種の男をめぐる女の恋は、さらに時代が下っても本質的に変らぬ面があった。そのよい例として「妹背山婦女庭訓」四段目の、烏帽子折求馬（もとめ）（丸本「求メ」とあるが慣行に従って「求馬」とする）実は藤原淡海の場合を挙げることができる。

この人物は大和国三輪の里で入鹿の妹橘姫に恋い慕われ、同時に酒屋の娘お三輪とも関係を持っている。まず橘姫であるが、淡海が姫とどのようにして出会ったかはわからない。しかし本作中の淡海は、神の如く聡明な大政治家藤原鎌足の子であるから、恐らく姫を入鹿に縁ある女と察しをつけて接近したに違いない。杉酒屋から姫

の跡をつけて来て追いついた時、姫に夜だけしか通って来ないのを不審だと言い、「名所をきいたる上はこなたより。二世の堅めは願ふ事」と問いかけているが、これは姫の正体に向って探りを入れているのであって、次の入鹿御殿までおだまきの糸をたどって来たところでは、「此御所の姫と有ればと。聞に及ばず。入鹿の妹と橘姫」と図星をさす。すると姫の方も、「入鹿が妹と知り給はゞよもお情けは有ルまい」と思って今までは隠し包んでいたが、そのことを「御存有りしお前こそ。藤原の淡海様」と男の正体を言い当てる。この問答には、既に互に相手の正体を察していたことを感じさせる口吻がある。が、それはともかく、ここで淡海は「誠夫婦と成たくば」入鹿が盗み取っている十握の宝剣を奪い返せと言い、「得心なければ叶わぬ縁」と返答を迫る。ここまで来ると、これを要求させるために淡海をして姫に接近せしめていた作者脳裏の設計図が、はっきり見えて来る。姫は結局四段目の最終場面で剣を取り戻すため大奮闘を演じ、その働きが認められて、朝敵の妹ながら淡海の妻となる。

もっとも、この筋立てに「入鹿大臣皇都諍」（竹田出雲等作）という先行作があったことはよく知られている。この作の四段目に登場する入鹿妹橘姫は、皇極天皇の弟大兄の君に恋しているが、大兄の君から結婚の条件として父の蝦夷の殺害を求められ、「朝敵の父上思ひ切て殺さふ」と決心する。結婚の条件に肉親の殺害を男から要求されるケースは他にいくらもあることで、古くは近松門左衛門作「用明天王職人鑑」二段目に、五位の助諸岩がさよ姫に兄の兵藤太を討てと要求することから、緊迫したドラマが形成される例がある。諸岩はさよ姫が自分に思いを寄せているのを奇貨として、「もしもの時の便にもと忍びて」妹背の縁を結んでいたのである。さよ姫は初めから諸岩を「京者（都の人）」と思って好意を抱いていたのだが、花人親王と山彦皇子の争いがこの島に及んで来た状況の中で諸岩がこの要求をつきつけることから、「扨は御身は都にて。親王様のゆかりの人か」と悟る。この場合、さよ姫は諸岩を、佐渡の島人の眼から、いくぶんなりと「貴種」に近い男と思うわけで、それが「夫の心のむごらしや」と泣きながらも諸岩の要求に従う心情的な理由の一部にはなっている。

既に見て来たように、男が政治や理念にかかわるような志を貫くために女の愛を利用しようとして、女が苦しい選択を迫られるというパターンはよく見られ、その場合必ずしも男は貴種であることを要しないが、やはり貴種である方が、当時の観客の心理として女性側の犠牲を受入れ易かったであろう。

それがよくわかるのは「妹背山婦女庭訓」の淡海とお三輪の関係である。お三輪は三輪の里の酒屋の娘で、「おぼこ育ちの娘気」が強く印象づけられるような純情な田舎娘である。隣家に住む美男の烏帽子折求馬に恋して一筋に「思ひ詰」ていて、どこかの美しい女が求馬を訪ねて来たと聞いて、「定めて夫ルは隠し妻」であろう、今までわたしに「千年ゞも万年もかはらぬ契り」と言ったのは偽りかと恨む。それを求馬はその場の「間に合と」を言ってごまかすが、お三輪は「さすがおぼこの解やすく」、すぐに信じて赤糸と白糸の「小手巻（苧環）」を取り交わして夫婦の約束をする。もっとも、次の道行の場でお三輪は橘姫に「外の女子は禁制と。しめてかためし肌と肌」と言い、後の場面でも求馬とは枕を交わしたと言ってい

るから、求馬はすばやくこの娘を手に入れていたことになる。

ところで、そもそも求馬実は藤原淡海は、何を目あてに身をやつして三輪の里の民家にひそんでいたのか。四段目切の金輪五郎のお三輪殺しから考えると、鎌足の計画に従って入鹿討滅に必要な「凝着の相」ある女を探すうち、この酒屋の娘に目をつけ、見かけはおぼこな娘だが、そこに凝着の相——本作では恋慕執着の念が強くて激しく嫉妬する相という意味に解される——のあることを見抜いて、これを利用しようとお三輪に近づいたと解釈する外はない。この場合の「利用」とは、入鹿の心を「とらかす（とろけさせる）」呪術にこの女の血を役立てることであったから、その計画は橘姫に対する以上に冷徹なものであった。まことに恐るべき政略を秘めた人物であるが、ここにも男の原理と女の原理が対極的な姿をとって現われている。

しかし作者はいまわの際のお三輪に、わたしのような「賤の女」が高貴な人と「暫しでも。枕かはした」のは「身の果報」で、「お為に成ル事なら。死でも嬉しい忝い」と言わせている。こういう男と女の関係は現代の観客の反撥を招くのであるが、貴種の男と鄙（ひな）の女との恋に見られる古来の伝統が、近世の浄瑠璃にはまだ強く生きていたのであった。源家再興・朝敵退治というような政治的目的に生きる貴種の男性原理が、このような場合にも正当なものとして受け入れられるのが、御曹司物語以来の浄瑠璃の伝統だったのである。

思えば近世武家社会では男と女の役割の分担は非常に明確だった。男（武士）は「公（おおやけ）」の勤務を持ち、家庭は二の次にして「奉公」に努めねばならない。それが建て前であって、男の生きる世界は「家」の外にあり、それは濃淡の差はあれ天下国家の「政治」につながる。これに対して女の生きる世界は「家」の中にある。家庭の平和幸福を維持し、それによって夫の「奉公」に後顧の憂いなからしめねばならない。このように女は限られた生活空間の中で、ひたすら男に尽くすことを教えられて育った。だから娘時代からの女の夢は、そのように尽くすに値する男とめぐり合い、そういう男をひとすじに愛することができるようになりたいということだったに違いない。

儒教は男女の「別」を強調したが、近世社会では男女の別が両性それぞれの人生観から感情に至るまでの相違・対照を際立たせていた。本稿は、このような「別」が浄瑠璃劇の構造において、どんな対立軸を形成していたかを考え、その作劇法の一隅を解明しようとしたものである。

（一九九六・九・三〇）